

# かかわることを好み、他者と自分を比べ、ちがいを楽しめる子 ～身体表現を用いてアサーションの対話を進める～

居澤 結美

子どもたちは自分の思いや願い・意図を伝える手段として言語を用いる。ただ言語だけでは、伝わりきらないことは多々ある。そこで教師はさまざまな子どもたちの表出されるものを読みとる。また言語を引き出すものとして描くこと、書くこと、表情など様々な表現を子どもたちができるように提示していく。その中で子どもたちの表現の過程があるからこそ学び（＝三位一体の対話）が生まれていく。

そこで本年度、その表現に身体を用いることでより学びが深まるであろうと仮説して、研究を進めていくことにした。身体表現は低学年児童にとって、そのもの自体が楽しい。また「どうしてそうしたの」と尋ねると言語を用いて伝えやすい。自分のつくった具体物（表現したもの）よりもみんなが共有しやすく、何度もできる、またその場で互いがまねてできるなど学びを深めるための利点は多々あると考えた。

キーワード：音楽における身体表現、かかわり、対話、アサーション、他者と自己

## 1. 研究目的

この研究に至った理由は、ここ数年感じる子どもたちの様子から考えたことである。

子どもたちは普段活発に動きまわったり、話したりするときの表情にやわらかさを見るのだが、授業になると、急に静かになったり、自分の表現を閉じてしまったりするように感じる。また意見を言って、友だちに「それちがうで」と言われた途端に泣きだしてしまったり、「そんなこと言わんといてよ!」とおこったりしてしまう場面も見られる。そうかと思えば、友だちの意見と自分の意見が違っても「どうしてそう考えたのだろう」や「けどぼくはこう考えたのにな」と思ったり比べたりすることもなく「そうなんだ」と受け入れている。どれも他者とかがかかわりあって対話していない。どれも他者を受けて入れていないように考える。

これは子どもたちがのぞむ、「こんな自分になりたい」という姿なのかなと考えた。

子どもたちは安心して言いたいことを言い、それに対して意見が言える、またそれに対して…、とても自由に発言できるが、その発言は課題に向かうものである。「あれ?なんで」と思っても、その理由をたずねられる。もしくは相手の立場になり考えてみる。そのような関係こそが、居場所のある学級そして、「問い続け、学び続ける」子どもたちを支えていけると考えた。

そして以下の理由で、音楽科でこの研究をしようと考えた。

音楽科の授業において、1年B組の子どもたち（低学年）は歌うときなどに、身体を使って表現することに対してほぼ抵抗なく、思いきりできるように感じられる。多少は「なんだか恥ずかしいな」と思っても、周りの友だちが楽しそうにしているのを見ると、自然と体が動いてしまっている。その思いの中に「間違え

たらどうしよう」、「変なのと思われなかな」、「それちがうで」と言われたらどうしよう」という思いはほぼないように感じられる。また書き言葉や話し言葉が拙い低学年、特に1年生にとって身体を使った表現は相手に思いや意図を伝える手段として大きな役割を果たすものであると考える。

そして、サブテーマは「身体表現を用いて、アサーションの対話を通して進める」とした。アサーションとは、心地よい関係を指すものである。心地よいとは、互いの考えや思いをまずは受け入れる。それが発言する側に安心感を生む。聴く側も相手の発言を受け入れようとする。「どうしてこんなことを考えたのかな」と考え、たずねる。安心感を得た子どもはまた自分の考えや思いの意図を話す。そのような関係性ができてからこそ、対話が生まれる。

まずは他者の意見を受容的に見ること聞くことから始める。そして課題に向かうために、自分の意見が通らないことはあるが、「それは課題に向かっているからであり、決して自分が否定されているわけでない。」という自己肯定感をもち、また相手も認められる対話を進めていけるのではないかと考える。

自分の意見を我慢して、友だちの意見ばかりを受け入れるのではなく、互いがいいなと思える答えを導き出せる関係もこの対話で感じ取ってほしいと考える。

音楽で他者とかがかかわって様々な身体を使って表現活動を用いることは、その時間が楽しいものだと感じられる。身体表現をみて、自分とは違う相手の表現を知ることにもつながる。身体表現は、比べやすく、何より受け入れやすいと考える。「これが正しい!」と求めやすい子どもたちにとって、音楽という開放的な空間や学びが存在する中では他者の動きを伴う表現は受け入れやすいものだと感じる。手拍子でリズムをとるとき、多少叩きにくくても、「間違ってるで」ではなく、

「なんかたたきにくいな。なんでかな」となりやすい。言われる側も、言う側も、発言がしやすいのである。

そこで本年度は、『かわることを好み、他者と自分を比べ、ちがいを楽しめる子 ～身体表現を用いて、アサーションの対話を進める～』とした。(図1)



図1 身体表現を見て、何かを考える

## 2. 研究方法

### 2. 1. 表現活動に身体を多用する

上記の仮説をもとに、音楽科の授業で身体表現を中心にとり入れていく。また、国語・道徳・生活・体育などの身体表現のしやすい教科・領域においても多様にとり入れる。それらから出る子どもの言葉としてとらえ、また書き言葉や話し言葉もあわせていく。

またモデルとなるように教師は率先して行う。またかわりを求めるため、身体表現をできるだけ他者で行える環境や課題を設定していく。

|  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・身体表現を多用する発問などの設定。</li><li>・身体表現から書き言葉、話し言葉を引き出していくだけでなく、それを他者にも伝える場の設定。</li></ul> |
|--|

### 2. 2. 相手意識をもてる課題提示

自分やグループの表現がどのように相手に伝わっているのかを常に意識できるような課題を出すようにした。自分の思いや意図を明確にもち、表現できているようで相手には伝わっていないことがよくある。表現する側も聴く側も相手意識をもつことで互いが理解し合えんと考えた。

課題を明確にして自己の課題をもち、どっぷりと浸り、自分が納得いくまで深めることができたなら、自分の意見に自信がもてるのではないかと考える。

- ・教師が単元達成のねらいをもった上で、課題は子どもたちが見つけ出したものを中心として進める。
- ・自己の課題にどっぷりと浸れ、思う存分身体表現できる時間をとる。
- ・身体表現活動を用いて子どもたちが自分自身の書きためたり、撮りためたり（ビデオ）して、過程が見られるようにする。
- ・深めた過程を友だちに発信していく。
- ・保護者にも発信（身体表現の発表の機会を設ける）し、過程・結果を褒めてもらう。

### 2. 3. 無音の環境を意識する

4月当初から以下のことを伝えた。

- ①音楽を聴くとき、グループの発言・演奏を聴くとき友だち一人一人の発言・演奏を聴くときは静かに聴くだけでなく無音とする。
- ②手に持っている楽器があれば、手から離す。
- ③話を聴くときは当たり前だが静かにする。
- ④音楽だけでなくすべての教科で行う。

誰かが話すとき・演奏するとき、今行っていることの手を止めて、自分の心と体を相手に向けて聴くことは、相手を大切にしているという気持ちの表れである。

また話している側にとっても、聴き手がそのような気持ちで聴いてくれているという安心感と自分は大切にされている存在なのだと感じられることで自尊感情が高まる。そのような雰囲気の中で子どもたちが学習できる環境が大切だと考える。これは、アサーションの対話を生むためにとても大切なことである。

### 2. 4. 相互評価

聴き合う関係づくりができていると仮定すると、その関係性を生かして、互いの身体表現を見合ったり、その言葉に耳を傾けたりできる。またどの点がよいのか、より豊かな表現ができるのかななどを伝え合うことができる。それは個々でも行うことができるし、またグループどうしでもできる。

互いの表現のどこがよかったか、どんなところがおもしろいと思ったのかなど、伝え合い相互評価ができる。友だちどうしの評価は、これからの学習意欲を高めてくれるものである。また教師にはない視点を子どもたちが持っていることもある。

この相互評価を子どもたちが伝え合うことで「つながる」を意識した関係性が築けると考えている。

### 2. 5. ペア活動

それぞれの感じたこと・気付いたことを出し合い、工夫をすることで自分とは異なる意見や考え方と出合い、自分の中に取り入れていくことで自己を更新していく。

また考えを伝え、話し合うことでかわりを深めていくこともできる。ペアでのかかわり合いを大切にすることで、友だちへの気付きが生まれてくる。

音楽を中心にして、“わらべうた”や“あそびうた”などを聴いて、朝の会で必ずペア活動を行っている。身体が触れることや身体を使って表現することはそれ以外の活動をスムーズにしていくと考える。

### 2. 6. 他教科・領域との関連を図る

音楽を中心にして、国語、図画工作、体育などさまざまな教科・領域と関連付けて学習を進めることができる。どの教科でも身体表現ができる場の設定を行いたいと考えている。



図2 自分で考え、身体で表現する

### 3. 授業の実際

#### ○本時で扱った楽曲について

「シンコペーテッド クロック」(ルロイ アンダソン, 教育藝術社の鑑賞用CD) を使用。

この題材では、いろいろな音に対する興味・関心を育てながら、音色の違いや音の様々な特徴をとらえて表現の仕方を工夫することに重点をおいている。音色が生み出す面白さを楽しみながら聴く鑑賞の学習を十分に深め、そこで得た楽器の音色への興味・関心をベースにして学習を展開していく。打楽器の様々な演奏の仕方を体験し、音色の違いを感じ取りながら、表現の工夫をしていきたいと考える。

#### ○指導要領との関連

A 表現 (1) 歌唱 ア, イ (2) 器楽 ア, イ, ウ (3) 音楽づくり ア, イ B 鑑賞 ア, イ, ウ  
関連する[共通事項] ア (ア) 音色, リズム, 強弱 (イ) 反復, 問いと答え

#### 3. 1 アサーションの対話

あき：トライアングルに似てる。

教師：どうして？

あき：速い動きだから。

はる：トライアングルだって震える感じだから。

なつ：一回ならしてみる？

\*あきが実際にみんなの前で鳴らしてみる

多数の児童：やっぱりそんな気がする。

ふゆ：すずの音にも似てる気がする。

ゆき：わたしもすずの音だと思った。

くも：ぼくはそれ、ピアノの上に置いてるのやと思う。

だって、おと似てるもん。

なつ：それもそう思う。

多数の児童：聴いてみたい。

\*くもが実際にみんなの前で鳴らしてみる。

多数の児童：ほんまや。めっちゃ似てる。これかな。

教師：まだありますか。

たか：ぼくはピアノに聴こえた。

教師：どうして？

たか：だって高い音の感じがするから。

多数の児童：そうかな・・・。

多数の児童：一回聴いてみたい。

教師：そしたらピアノも一回音を聴いてみる？

たか：うん。(実際に弾いてみる)

はる：やっぱり違う気がする。

たか：ぼくもやっぱり弾いてみて違う気した。

教師：どうして？どこが違うと思ったの？

たか：ピアノは高い音は似てるけど、なんか鉄みたいな音とちがうから、ちがうと思う。

多数の児童：うん、やっぱりちがうって思ってたけど。たかくんの聴いてみて、ピアノはちがうってわかった。

はる：けどトライアングルがすずかベルかは分からん。

上記の授業記録は、秒針をあわしているのはウッドブロックと確かめてから、目覚まし時計の「ジリリリリーン」という音はどんな楽器であらわされているかを話し合っている場面である。

#### 3. 2 身体表現を多用する(本研究会から)

\*ある児童が身体表現で眼球をチクタクチクタクと曲に合わせて動かしていた。

それに対して、

教師：すごいですね。今、ゆきちゃんは目の玉を曲に合わせてチクタクって動かしていましたよ。

はる：え～、どんな風に！

なつ：見せて～。

\*実際に動かしてみる。

あき：ほんまや、動いている。

曲を手拍子でリズム打ちしたり、秒針をあらわしているウッドブロックのリズムを腕や指、全身をつかって身体表現していた。それぞれ自由に表現していた。

目覚ましのベルを表現しようと、体を震わせながら楽しそうにしていた。図3と図4の様子は最後に楽曲を通して聴いたときに、ある児童が行った身体表現の様子を見たり、身体表現をしたりしている様子である。

この身体表現は、秒針という細かな動きを表している。指や腕など細かくリズムを刻める部位という言葉にはせずとも、その身体表現にかくされた意味がある。眼球を動かすことはそれを表しているようで、教師が「チクタク」という言葉に置き換えた。



図3 友だちの表現を見て考える



図4 身体表現で自分の考えを伝える

#### 4. 題材の考察

3. 1は、何気ないやりとりであるが、子どもたちは鉄の響きを聴き分けて、「そうかな」とクラス全体が感じていた。けれど、1人の児童が「ピアノの高い音だと思う」と言ったことに対して、「そんなちがうで」、「ピアノの音と全然違うやん」とはならず、「そうかな・・・」、「一回聴いてみたい」と周りからの発言が出た場面である。ここで、自分が納得できないことに対して素直に「ぼくは・・・」とみんなに投げかけることができること、またその声をきいて、「そうかな」と耳を傾け、一度たしかめることに同意できる、また自分も聴いてみたいと思えることが学び合える学級風土だと考える。友だちの意見をまず聴き受け入れる、そして自分の意見を述べる、その繰り返しが深い学びや本質にせまる話し合いにつながるのだと感じた。

子どもたちは、友だちがどうしてそのような言葉を発したのかということ、考え、次につなげることを意識している。また、表情・しぐさ様々な面でもみとろうとする。と同時にそれ友だちに返そうとするので子どもたち自身が自分の表現すること・言葉、友だちの表現すること・言葉に敏感になったように感じる。

また、聴き比べる、感じを比べるなど、音楽の感じ方・聴き方・演奏の違いなど様々なところで「比べる」ということを子どもたち自身が行いたいと思っている。「実際に聴いてみたい」ということを言えたり、友だちに促したりと自ら対象とかかわり、他者とかかわっている。そして今まで自分が「この音は子の楽器だ」と考えていても、別の音を耳に入れると「うん？この音もそうかもしれない」や「この音はやはりちがう」と自己の中で振り返り、考えを固めたり、更新したりしている。

3. 2では、教師が身体表現を言葉に置き換えたが、この置き換えることを子どもたち自身が「どうして、目を動かそうと思ったの」とたずねたり、感じたりできるようにしていくことが学びの高まりがみられると考えた。そうしていくためにも、日頃から子どもたちが無意識にしている言語にできない動きである身体表

現に教師は「どうして、その動きをしたの？」と意味を持たせることが大切だと考える。

#### 5. 成果と課題

成果として、アサーションの対話を行えば、そこから学び（対話）が深まっていくことは明確であった。「ぼくの見解はこれ！」と決めたとしても、それ友だちの意見を聴きながら「やっぱり！」と思えることや、「いやちがうかも」など自己の考えが更新される。それは他者と対象とかかわるからこそである。

課題としては、やはりこのアサーションを主観的なものとして終わらせてはならない。客観的に実証し、この対話をたしかな子どもたちへの手立てとしていくには、子どもたちの様子や表現したものを細かく見ていくことと合わせて、多くの授業記録を分析したり、アンケートをとったりしていく必要がある。

身体表現の有効性も見られた。低学年にとって、身体表現が自分の考えや思い、意図などを伝えるものとして機能していた。そして、それ以上に有効性を感じたことがある。それは、子どもたちの興味・関心・意欲が高まったり、その表現を見ようとしたりすることである。図4をみると良く分かるが、身体表現をすると子どもたちは見てしまうのである。これは言葉や書いたもの、つくったものを通しての発表とはちがう。言葉だけの発表はやはり見なくても通ずるときがある。書いたものや具体物は変化しない。だから、話し言葉が拙ければ、興味・関心・意欲がおちていくことがある。けれど身体表現は常に変化し（動き）、その場で共有できるのである。

身体表現の課題としては、子どもたちの身体表現をどれだけ教師がもしくは子どもたち同士が見て、感じ取り、価値付けたり、意味付けたりできるかということが重要になってくる。どんな身体表現も、もちろん認められる。ただそれがどのような根拠で行われているのかということが学びの過程の中で必要不可欠である。もし本人が「なんだか体が動いた」と感じるなら、「それは〇〇からかな、もしこの音楽が△△ならそんな感じした？」と比べながら、その根拠を明確にしていく必要がある。その役目を教師や子どもたちどうしができるように、単元構成やねらいをもって授業に取り組んでいきたいと考える。

#### 参考文献

- ・文部科学省(2011)「小学校新学習指導要領解説」音楽科
- ・佐伯 胖(2010)「『学び』を問いつづけて  
～授業改革の原点～」小学館
- ・金本 正武 坪能由紀子 [編著](2009) 東洋館出版社  
「小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり音楽」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2011)  
「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための  
資料【小学校 音楽】」 教育出版